

令和元年5月13日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02448

研究課題名(和文)メタファーにおける観察の二重化とメディア機能

研究課題名(英文)Metaphor as medium and observation in the second order

研究代表者

鈴木 純一 (SUZUKI, JUNICHI)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：30216395

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、「メタファー」という現象の特性規定に関し、意味論的な側面(「本義」と「転義」の差異)に基礎を置きつつも、機能論的な側面(「接続」と「切断」の相反する二重の役割)へと重心を移行させることでその展開可能性を広げたことにある。これによって、メタファーのメディア的なメカニズムを抽出すると同時に、社会学的「観察」概念(二次観察)との接続が可能となった。この理論的成果と、具体的なテキストや作品等の分析結果とのフィードバックを繰り返した。このことにより、メタファーという意味の二重化がもたらす効果を、逆説や同語反復等をも取り込んでいくシステム理論と関連づけ、より明確な概念規定を可能にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は「メタファー」という表現形態の有する特性を、レトリックとしての意味論の領域のみならず、機能論的に拡張し、理論的には社会学理論の「観察概念」、メディア学理論の「接続・切断」概念との関連性を示した。加えてその具体的な現れとして、文学・社会学・法学、歴史学等の学的テキストやアートにおける批評概念との関連性を分析し、部分的にせよその実証的な検証を行ったことにも学術的かつ社会的意義が認められる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine a metaphor from the angle of the observation. That way, the feature as the function of the metaphor will be brought into sharper focus. A metaphor involves "cutoff" and "connection" processes at the same time while duplicating the meaning of the expression. In other words, a metaphor contains two contradictory elements at the same time. This study analyzes the function of medium of the metaphor from the perspective of social theory. The thesis also argues that paradoxes and tautologies, etc. are a fundamental principle of a metaphor by quoting system theory.

研究分野：ドイツ社会・思想・美学・文学

キーワード：メタファー メディア 二次観察 システム論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

メタファーは、近年様々な領域においてその重要性を指摘されている。修辞学における古典的な効果論や文学における創作技法として、認知言語学あるいは社会心理学におけるスクリプト機能や意味論のスキーマ生成原理として、哲学における論理の可視化と展開の方法論として、社会思想におけるコミュニケーション・システムの構造として、さらには、工学的な情報処理の技術においてもその有効性の測定基準として、メタファーは注目度を高めている。メタファーに対するこのような関心に通底している原理として、本研究ではメタファーの「メディア的機能」ともいべきものを想定し、メタファーの持つ「接続」と「切断」という効果に着目した。また、そのメカニズムの解明にあたって社会学の理論における「(二次)観察」および「観察の二重化」という観点からアプローチするのが有効ではないかとの発想に至った。

2. 研究の目的

上記のような発想から、本研究は、メタファーが構造的に有する機能、すなわち、意味の観察を二重化し、本義と転義を一時的に切り離れた後に、両者を再び接続する機能を、広義のメディア・コミュニケーション活動一般とその継続を可能にする基底的なメディア原理と仮定し、その理論的な妥当性を、言語学、美学、テキスト論、法学、歴史学、社会思想等の、主に人文社会科学に関連する理論領域との整合性を測りながら検討すると同時に、諸領域の具体的なテキスト・作品等も含めて分析することにより、その有効性の射程を検証することを目的とした。

メタファーという現象は、一次観察においてある表現の意味が二重化されること(本義と転義)および、その二重性が二次観察において異なるものの同一性として見做されること、の二つの観察に依拠していると考えられる。換言すれば、オブジェクトレベルにおける意味の二重化、およびメタレベルにおける切断されたものの再接続という、二つのレベルにおける二重性を含んでいるということである。このような二つの二重性の観察の結合から、メタファーは、一時的に離反された意味を仲介する機能、およびテキストないしコミュニケーションの生産を継続させる機能の二点において、触媒的メディアとしてのメカニズムを有している。このメカニズムの理論的な精緻化と、具体的なテキストに即した分析が本研究の中心課題となっている。

3. 研究の方法

本研究は、文献読解を中心とする人文社会系のオーソドックスかつ古典的な研究方法を取り、関連するテキストや作品の綿密な読解をもとに、研究分担者・連携研究者による研究会を軸に進められた。各研究会では、所定のテーマに関する担当者の研究報告と、これに基づく討論が行われた。また必要に応じて認知言語学、社会心理学、哲学、メディア社会学等の専門家の協力を仰ぎ、メタファー認知、論理的処理、メディア技術社会論などの理論的・実証的諸研究の方法・視点を適宜取り入れていった。参照した理論的領域の主なものを挙げれば、古典的隠喩論(アリストテレス等)、現代隠喩論(リクール等)、認知理論・身体メタファー理論(レイコフ等)、エクリチュール論・(間)テキスト論(デリダ等)、メディア理論・批評理論(ベンヤミン等)、コミュニケーション理論(ハーバマス等)、社会システム理論(ルーマン等)、

歴史学・法理論(ホワイト等)となる。分析対象として扱った具体的な素材・テキスト・作品は、それこそ多種多様な領域にわたり、敢えて系統的な選択をしていない。

4. 研究成果

(1)研究の進捗と知見の獲得

まず年度を追う形で、本研究がどのように進行・発展し、知見の獲得や成果となっていたかについての概観を記しておく。

平成27年度は、初年度として、「メタファー」と「メディア」の構造ならびに概念的な関連付けに関する暫定的な理論仮説を立て、分析装置として練り上げることを目標においた。その際、キー概念となるものは、「接続・切断・観察・メタ化」であることが確認され、また、この作業では、両者における理論的研究史の整理・比較考量のみならず、周辺領域に置ける関連理論を幅広く検討し、有効性が認められるものを取り入れていくことも視野に入れて進められた。予備的な仮説において、これらを束ねるのは、メタファーの「同一/非同一」差異(「本義と転義」の意味論)およびメディアの「同一化/非同一化」同一化(「接続と切断」の機能論)の相互依存的なメカニズムでないかと考えられた。また、年度の後半においては、具体的な素材として分析対象とするテキストの候補の選定と分析方法の検討もおこなわれた。

平成28年度は、前年度の仮説に基づき、メタファーとメディアの機能的な関係性に関する理論的な研究の深化、およびその観点を中心とする多様な領域における具体的なテキストの分析の蓄積、そして両研究のフィードバックによる仮説の精緻化、という作業をおこなった。

の理論的な研究に関しては、本研究の基本的な発想と重なっている、言語・記号と身体性の相互観察作用としてのメタファー(レイコフ等)の理論を丁寧に読み解く作業を継続した。また、社会理論における二次観察(メタ観察)のメディア制度化と固有の機能システムの分化の

連動メカニズムの解明を進めることで、メタファーのメディア機能に関する仕組みがより明確な形で浮かび上がってきた。言い換えれば、メタファーの基底にある自己言及的な観察による「差異(自己観察の二重化)」の可視化のメカニズムである。このような関係性を、具体例から明確に引き出すことは難しい作業であるが、思想、文学、批評、科学、芸術等の様々なテキストやメディア作品を事例に、の作業を行い、少なからずの研究を裏付ける事例を見出すことができた。(例えば、法理論における前例のない事案の記述、あるいは文学における言語批判の表現、等々。)ただし、のフィードバックの繰り返しに関しては、まだ十分な具体的分析データが揃っていない段階であり、次年度以降の課題となった。

平成29年度も、研究計画に従い、前年度同様、当初の仮説に基づき、メタファーによる観察メカニズムとメディア機能(接続と切断、あるいは物語の構築と反語的な批判)に関する理論的な研究、およびこの観点から多様な領域における具体的なテキストの分析と解釈、そして両研究のフィードバックによる仮説の修正と精緻化、という作業を継続しておこなった。

の理論的な研究に関しては、メタファーという二次観察形態が果たすメディア機能に関する仕組みがより明確になった。すなわち、前年度に仮説とした、メタファーを基底で支える自己言及的な観察(オートポイエーシス)がもたらす「差異」の形象化(=自己の二重性の可視化)が、非対称的な「ずれ」(切断)を生み出すと同時に両者をつなぐ(接続=メディア)機能をも有するという構造である。の作業では、で理論的に予想されるメタファーとメディアの関係性を、具体例から引き出すことを引き続き試みた。思想、文学、歴史、社会、批評、科学、芸術等の様々なテキストやメディア作品を対象として取り上げた結果、直接的表現としては一致しなくとも、構造的に対応する事例を見出すことができた。(例えば、歴史記述の展開を規定する喩法、移動における偶発性を必然性に変える他者の隠喩的視点、近言代文学における言語批判に見られるアンビバレントな隠喩評価、戦争をテーマとしたアートや記念碑における隠喩を介した想起、等々。)これらをもとに理論の再検証(のフィードバック)に関して、着々と進められた。

最終年度である平成30年度は、これまでの作業の集約と、得られた知見の整理を中心に研究を進めた。その際、主に、理論的な仮説と具体的テキスト分析の成果とのフィードバック、対応関係の検証に重点を置いた。まず、理論的な側面では、メタファーの意味論的な定義と機能論的な定義の組合せによって、メタファーの展開可能性をより生産的に規定できることが明らかになった。このことは新たな成果と考えられる。すなわち前者の定義(この場合は「本義」と「転義」の差異化構造が中心)においては、メトノミー、シネクドキ、アイロニー等とメタファーの違い、すなわち主として水平的なレトリックの分類に焦点が絞られている。しかし、それらの分類に基づきつつも、更に後者の機能的な意味に着目することによって、対象把握あるいは対象創造といった効果をメタファーからより明確に取り出すことが可能になる。この場合、メタファーの二重のベクトルである「接続」(結合と継続)と「切断」(分離と中断)すなわち「メディア機能」が前面化する。ここから、いわゆる構築主義的な社会理論とメタファー構造の親和性、言い換えれば、対象「観察」におけるメタ化(二次観察)とメディア化(再帰性)のメカニズムが両者に共通するということが確認された。この理論的な新たな知見と具体的なテキスト分析の成果との整合性について、特に法学、社会学、文学、歴史学のテキストに沿って実証的な分析も試みた。それぞれの分野における特性の偏差はあったにせよ、基本的には「メタ化(二次観察)とメディア化(再帰性)の(相互依存的な)メカニズム」を確認することができ、とりわけ社会学における「システム理論」における「観察」概念との親和性・整合性が高いことが明らかになった。

(2)本研究の問題意識と総合的な成果

本研究は、理論社会学における「観察」概念と、言語・認知・表現行為一般における「メタファー」という現象を、そのプロセス(受容と理解)から比較検討しつつ結びつけることによって、両者の機能的関連性を浮かび上がらせると同時に、この複眼的・相互的な観点から明らかになる論理構造上の問題(接続と切断、差異化とメタレベルへの移行、自己言及と逆説・同語反復等)に着目し、そのメディア的な意義と展開可能性(対象世界の継続的更新)を考察することを目的としていた。

メタファーという現象を、機能的な側面から考えると、「字義通りの意味」(暫定的に「本義」と呼んでおく)に揺らぎをもたらし、指示するものと指示されるものの確定的な対応関係を回避しようとする働き、そのような志向性をもつ表現と特徴づけることもできる。ことばの(あるいは「表現行為一般」の)解釈を、一義的な一対一関係からずらし、「字義通りでない意味」(暫定的に「転義」と呼んでおく)をもたらし、表現に「遊び」としての幅がもたらされ、意味の「二重化」ないし「ずれ」という現象が生ずる。ここで着目すべき点は、メタファーがメタファーであると意識化されるのは、それを受け取り理解される場、すなわち「観察」の場であるという構造的条件である。ある表現を「本義」ではなく「転義」として解釈するという必然性は、その表現が「字義通りの意味」では何らかの形で妥当性を欠くこと、その非妥当性が「字義通りではない意味」によって妥当性を回復すること、このようなプロセスが、段階的であれ同時であれ、観察され理解される場で生じていることによる。つまり、メタファーは観察(対象ではなく主体)と相関的に成立する現象であると想定される。

社会学者のルーマンは、「コミュニケーション」という概念を「情報・伝達・理解」という三

局面での選択過程とそのオートロジカルな継続性と定式化した。その際、注目すべきことは「理解」という局面で行われている作業が「情報」と「伝達」の差異の「観察」であるとした点である。この「理解」(観察)そのものが更なる「情報」となり、「伝達」され、再び両者が差異化される形で「理解」(次レベルにおける観察)が生じる。このコミュニケーションの自己再生産システムをルーマンは「オートポイエーシス」と特徴づけた。すなわちこの社会(システム)理論におけるコミュニケーション概念において構成要素の中心となっているのが「観察」であるということ、およびそのプロセスが、先に見たメタファーという表現形態の解釈プロセスとパラレルな関係になっている。

このような「差異化と再結合の連続体としてのコミュニケーション」という形態は、メタファーの理解の場における「本義と転義の意味の二重化(=切断)」と、「二重化された意味の一つの表現における再度の重ね合わせ(=接続)」という、一見相反するベクトルが(そしてこの「接続と切断」の両義性こそが「メディア」機能の核心であると考えられる)同時に含意されている。二重化と再結合というこのような意味の揺らぎ(振動)という状況に関して、ルーマンのシステム理論は(観察する)システムにおけるパラドクスとトートロジー、メタレベルとオブジェクトレベルの交錯等、論理上想定される問題群を(彼独自の)コミュニケーション概念に即して展開した。本研究では、そのような知見を、具体的な分析に基づきながら、メタファー(加えてメトニミー、シネクドキ、イロニー)が内包する機能と特性、すなわち「類推と知の組織化」、「オブジェクトとメタの階層性のねじれ」、「メディアとメッセージ」、さらにはこれらの相互入れ子的な構造の解明を試みた。

「メタファーという観察形式」は、敢えて言えば、社会システムの「オートポイエーシス」の要件と見做すこともできる。論理的な整合性よりも、むしろ、意味の二重化がもたらす切断と接続の両義性、メタとオブジェクトの観察レベルの振動、論理的矛盾と二重の自己指示(リエントリー)による反転のパラドクス。メタファーにおいては、これらの(自己)再生産に寄与する機能的重要性が強調されるべきであろう。メタファーは、ともすればコピーとトートロジー、模倣と反復の間で衰弱しかねない記号化・体系化された(知の)表現世界、(見かけ上)観察と相関しつつ生み続けられる対象世界を、常に揺り動かし、創発的水準へと引き上げる力を持つ。「切断」と「接続」の交替するオートポイエーシスの先に、閉鎖的な自己循環を破る力を認めることができるとすれば、「メタファー」とは、「観察」を通じた(実在的な)「他者」へのひとつの通路としての再帰的「メディア」原理であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

鈴木純一、社会理論における観察概念から見たメタファーの機能、『メディア・コミュニケーション研究』第72号(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院) 査読有、75-93頁、2019年

鈴木純一、歴史記述と喩法に関する一考察、『国際広報メディア・観光ジャーナル』第27号(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院) 査読無し、87-98頁、2018年

山田貞三、神は言の葉にすぎなかった、『独語独文学研究年報』44(北海道大学ドイツ語学・文学研究) 査読有、1-27頁、2018年

高橋義文、神的力Xへの予覚 見ることの根源条件、『北海道大学観光学高等研究センター叢書』11、査読無し、219-237頁、2017年

吉田徹也、トーマス・マン『ドクトル・ファウストゥス』の謎再び、『札幌大谷大学紀要』46、査読無し、15-30頁、2016年

〔学会発表〕(計1件)

西村龍一、認識の翻訳可能性と不可能性に関する試論、北海道独文学会、2018年

〔図書〕(計1件)

西村龍一、呼びかけと応答、浜井祐三子編『想起と忘却のかたち』所収、三元社、154-184頁(総頁数322)、2017年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：山田 貞三
ローマ字氏名：(YAMADA, Teizo)
所属研究機関名：北海道大学
部局名：文学研究科
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：50128237

研究分担者氏名：西村 龍一
ローマ字氏名：(NISHIMURA, Ryuichi)
所属研究機関名：北海道大学
部局名：メディア・コミュニケーション研究院
職名：教授
研究者番号（8桁）：10241390

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：吉田 徹也
ローマ字氏名：(YOSHIDA, Tetsuya)

研究協力者氏名：高橋 吉文
ローマ字氏名：(TAKAHASHI, Yoshifumi)

研究協力者氏名：梅津 眞
ローマ字氏名：(UMETSU, Shin)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。